

酒前茶後錄

大正八年八月起筆

九

特別

14

1919

325

















に後まざるもの、余の趣味に属する者(例へば印鴉を  
石の昔の風さ)と自ら標準とする、書名の昔を燐  
い入るもの才二の七のに属するもの也(二月四日日記)  
○毎年、首に熱病を行く、何れあることを止めに  
板を何れ行くことよふに甚ることさ(海嶽の氣)  
み流しはいとよむむむむ、(海嶽の氣)と云ふ  
びある、と云ふ(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)と云ふ  
流し九自分の言をいふ、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)  
自分の留滞點をいふ、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)  
年を行く、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)  
言ふ、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)  
たとのまさ、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)

既作しと云ふ、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)  
の教り、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)  
多作りの、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)  
いふ、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)  
海嶽の代へんと、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)  
草と行き、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)  
言ふと、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)  
心及び、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)  
その、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)  
此の、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)  
と云ふ、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)  
○三枚、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)と云ふ、(海嶽の氣)



稿紙を一巻を賜う事ある。余は三枚を名刺ある  
一而後らるるはあり。余は山陽故米ありし。

陳者別封一卷ハ初メ頼山陽ノ高足石川章ガ  
山陽ヨリ賞ヒ受ケ傳ヘテ其嫡裔関藤國助氏  
(二學士)ニ到リタルヲ頃日同氏ヨリ東京  
帝國大學ニ献納レタル原本ノ撮影ニ御座候。  
就中<sup>□</sup>或謂頼裏<sup>□</sup>曰云々<sup>□</sup>ノ一篇ハ御兼知ノ  
如ク山陽ガ其死ノ約旬日前、猪飼敬所ト南北  
正統ノ事ヲ論ジテ議大ニ合ハズ、憤慨ノ極、病  
ヲ強メテ、之ヲ作り特ニ<sup>□</sup>日本政記<sup>□</sup>（第十四卷）  
初論ノ後ニ加ヘタルモノニシテ山陽遺墨ト

シテハ最モ貴重スベキモノ、ト思惟仕リ候。  
今田関藤氏ヨリ同好ヘノ寄贈ヲ依囑セラシ  
候付壹部郵呈仕リ候間、恐入候得共何等カ御  
一言ヲ賜ハバ光榮不遇之候。

右御聽キ相願ヒ候為メ如斯候也。敬具

頼山陽研究会主幹

大正八年一月十二日 三枝光太郎

市嶋 謙吉殿























呈送晴印刻

幸は晴印の刀風の技巧  
好まざるは好まざるものに  
はな



小舟乾侯  
打

秋州  
道人

師子宮裡

梨園素岳刻

コケラが拙考ニテ布義モモノニナリ  
尾ラト四馬リヤリタルニ

改刻ニテ送ラコシタルハコケラニテハ  
大ニ面白ク改めたる如クに原女何



山田素山刻

一字カハは古く自印最モ  
素山印のものに  
はな



スツテ  
ミナ石



一ツテ以後と

此後日甚とか猪に  
考ルカ如しと云ふ  
女何

此の如く印ハ  
素山印子孫と見るとに堪へず





せーいふ  
 又 蛾 意  
 鐘 鼎 新 儀  
 二



毛

まもちして



かこの女 田舎

刻 せーいふ

一 尖 意

積 州 意

群 意 積 州 意



まへまへ  
とめい

○年首七城に終に揚けし余の活活の事記をなす  
おめりまへ、この思作いよけんい、因る出結日の  
活活らんハ不満足のものまへ

# 大戦意

## 緒言

一陽來復の春と共に、御同様に  
平和の來たそである。過去五  
に互る歐洲大戰が、所謂歐洲大  
戰に止まらずして、餘炎の及ぶ  
處、米利加より日本に、大西太  
平洋を挟んで、正しく世界的  
大戰を實現したとは、人類に歴  
史有つて以來斯の如き大規模の  
戰爭は無く、未だ此の如く慘烈  
の光景を演じたとは無い。人類  
の恥辱、世界の恥辱、然して洵  
に文明の恥辱であつた。  
見、吾等は是れを客觀的に立  
場に立ちて大戦經過の跡を眺  
に驚異を得た、白熱的感情を傾  
注し、人智の限りを極盡し、總  
ゆる人力の「總計」を披露して、  
けた五年間の戦争の裡に、何う

して多大の犠牲と驚異とが無く  
て已まう、自分が多くの或物を  
其處から獲たとは、寧ろ自然の  
數と謂ふべきである。  
由來人間と云ふ者は、事實の前  
に正而し乍ら、其現象に眩惑さ  
れて、因つて起る原因、因つて  
來る「意識」を必然看過する  
往々ある。之は決して人智の啓  
發に資し、人文の進歩に伴ふ所  
以でない。自分は此點に於て一  
隻眼を有すると云ふのも何で  
も無いが、然し大戦意外に一  
篇が那邊に着眼して居るかは江  
湖の了解を望む處である。勿卒  
の同、他人に筆鋒せしめた爲め  
に想と文と尚ほ幾分精緻の餘地  
を任する様であるが、今は訂正  
の暇を許せぬ、これ亦江湖の有  
怨を請ふ處である。

めてやり度い。處が其最後が  
はぬのは何うしたものか、戦ふ  
毎に捷たざるなく、攻むる毎に  
せざるなく、白耳義、露西亞の大部  
分を占領し、戦線深く佛の地へ  
侵入して居て、而も自國は八寸  
の地をも他に侵されず、軍隊は尙  
ほ幾百萬を數へ、軍器も相當充實  
してゐると観らるべきに拘らず、  
卒然として砲と、占領地と、大艦  
隊とを擧げて敵に捧げ、殆ど降伏  
的休戦條約を結ぶに至つた窮蹙の  
態度は全く意外中の意外である。  
如何に過去三千年の世界史を探る  
も、斯様な例は自分には知らぬ、之  
がまづ第一の意外。

# 外録

## 市島春城氏談

東 京 社 員 筆 記  
までが、眼の上の翳としてゐた大  
露西亞が、大戰半に自ら土崩瓦解  
し、皇帝蒙塵、軍隊解散、革命政  
府成立、然して勢ひの窮る處遂に  
執逆を行ふに至つた事實は、紫雲  
一閃、天地傾ち晦冥に陥つた光景  
にも比す可く、世界のあらゆる國  
地をして全くアレロノの感あら  
しめた。而も此大悲劇の主人公サ  
ア其人は、曾て大津事件を以て吾  
々日本國民には特に深い印象を與  
へてゐる人である。其人が世界大  
戰開幕の大立物であり、重要な責  
任者であり、然して倏ち革命、倏ち  
瓦解、倏ち蒙塵、倏ち執虐と云ふが  
如きは餘に意外である。嗚呼尚ほ  
憧憬の眼にあるは眞に露西亞革命  
の一幕、就中サア没落の光景であ  
る、これも亦大なる意外である。

三  
文明の進歩、世界交通の發達から  
見れば今回の如き大規模の戦争の



起つたのも不思議では無いが、しかし何人が想像したよりも、すべからず戦費が馬鹿に大きい。また戦争の準備は附いて居らぬが、此頃の或る外電報に見えた處に據ると大體に於ては判明して居るらしい。無事正論は期すべくもあるまいが、其計算を見ると

獨逸死者	三百萬人
英露死者	五百萬人
合計	八百萬人

とある。次に負傷者の数は意味が合せて三千万人を越ゆるとある。東に四千万人の人間が或は死し或は負傷すると云ふは、戦争の大さから見れば尤ものことであらうが、然し四千万人と云へば朝鮮を除いた日本の全人口に當るのみならず死にもせず、負傷もせぬ多数の出征者がまだ、是れ以外に幾何あるかを思はなければならぬ。或外國の新聞紙は世界の九割が實に戦争に立つたと報道して居る。少の誤算はあるとしても、却て意外の數ではあるまいか。

と、クリミア戦争、普魯士戦争、露土戦争、亞米利加南北戦争、日清戦争、日露戦争以上六大戦争の戦費總額を凡そ三百億に上つてゐると出してゐる。然るに今度の戦争の今までの戦費總額三億圓に達してゐると云ふから、前記六大戦争の戦費は僅に一割にしか當らぬ、換言すれば六大戦争の十倍の規模であることは意外と謂はざるを得ぬ。

戦ひの最初に遡つて考へると、獨逸は斯様のことを期して、長い間公然と兵隊に軍備を蓄へしつゝあつた譯であるから、急激な戦となつた。佛、露は前途の氣づかばるる程に負かされた。然るに之れ位不用意であつた英佛が負けて居るに驚かされて居る。その間に漸く準備を整ひ、ピタリと腰が据はると、存外強味を示した。無敵の亞米利加が戦つた關係もあらうが、然し英佛それ自身も後れれば戦争中、鐵砲だ、大砲だ、飛行機だ、自動車だ、微細な命令と騒ぎ廻り乍ら軍備を整ひ、遂にそれを仕了せた。意外である。佛蘭西は負け續ける。巴里の政府「エポールド」へ移されると云つた時、此は聯軍の前途も危なれた。然るに此間に新たなる一大波亞米利加が漸く起つて、兵を募る、それを訓練する、船艦を運る兵器を製造する、まるで泥棒を捕へてから縄をなえ始める。と云ふ趣きがあつて、果して此の後れ馳せの軍備が間に合ふものかと思つた位なものである。現に獨逸も高をくみつて間に合ふぬものと打算したのが敗因の一である。と聞いて居る。而るに此の後れ馳せの準備が間に合つて三四十萬の軍隊が戦場に現れ、それか急作りの鳥合の兵と思ひの外、なかく善く戦ふので、獨逸の心臓を初めから來からしめた。さて亞米利加の兵力は無敵とも云ふべき程で、五十萬六十万と追々戦

に就くので、獨逸もこゝに兜を脱がざるを得ざるに至つたが、此の大なる援軍の後れ馳せの参戦が間に合ひ、終に勝敗の司命を制するに至つたことも意外とせざるを得まい。

六、  
今度の戦争に於て戦術が各種々(理化學上の發明をして戦局の上に多大の貢献をしたことは、夥しいものだが、然し今日吾々に判つてゐるのは其全部ではないから、追々

と尚ほいろいろのものが判明して來るであらうが、中には頗る吾々を驚かすに足るものもあるとであらう。そこで先何人も知つてゐるのは飛行機、飛行船であるが、之等のものは戦前も無論あり或程度迄は實用に供されるなどの事實もあつたが、此五ヶ年間に彼らに著しい發達を遂げようとは實は思ひ設けなかつた。今度の戦争で尤も大切な役目を勤めたものは、海上に於ける軍艦同様空中に於ては飛行機飛行船で行つたと言ふ迄も

ない、唯に非常偵察や威嚇に重大の働きを遣つたのみでない、群が飛ぶ鳥が空に飛翔する如く幾百の飛行機より一隊に投下する爆弾は時に軍隊の要部や倉庫や道路などに重大の損害を與へ、砲力以上の猛威を振つた。そこで飛行機が攻めて來ると、飛行機で防戦することになり、空中の大戦が起る處に行はれ、その勝敗が戦局の勝敗にも影響することになつた。戦前では飛行機と云へば遙かに都市との聯絡をする位が精々であつたのが、今度は飛行機が著しく飛ぶが、今度には敵陣地を越えて海を渡り、敵の空に出で時には北極の怒濤を俯視して英國の沿海都市を襲ひ、道の英國人をして深夜夢見かざるを得ざらしめた。日本の如きも一度は何時加勢から敵の飛行機が襲來するか押らぬと云ふ恐怖を惹起した時もあつた。就中面白いのは白耳義王が一機に搭乗して英國の祝典に列せられた事實である。帝王を飛行機に乗せたのはこれが嚆矢で、小説にでもあり

七、  
もうなことが實現されたのも意外である。

更に天を空に放せば、空中から火薬の材料を探ると云ふ様なことも行はれた。一休空中中の空素から火薬を探るの可能なは、理化學上から信ぜられてはゐたのだが、然しそれが實戦の用に供されたのは全く今度が始めである。從來は戦争をするに印度の綿と智利の硝石とが欠く可からざる材料とて居つた。是が無ければ煙硝も綿火薬も作ることが出来なかつた。今度の戦にも獨逸は戦前非常に多量の硝石を人知れず買込み、お終ひには置場に困つて民家の床下などに蓄積して置いた程であるが、如何に蓄積したとしても、五年に亘る戦争の用を充たすと云ふとは不可能である。處が先陣歸朝された高橋博士の語に據ると、獨逸では一學者が戦前に空中から硝石火薬を作る方法を發明し、よしや硝石の盡くるにあつても、之があれば大丈夫事は缺かさぬとカイゼ

ルも大に安心したといふことである。無論聯合軍でも同様の研究はしたであらうが、斯様な進歩もない物が發明された爲に、モット早く片附く可き戦争が長引いた。思はれる。本來の如き大發明の實地に用を爲す迄に進むには平時ならば七年や十年もかかるものであるに、それが必要と云ふに孕まれて忽ち生れ忽ち用立に至つたとは人智も偉いものである。兎に角今度の戦争は空界に一生面を開いた、即ち占き地上、乃至地下の戦争時代から新に「空中の戦争時代」に入つたと云つてよい。

八、  
毒瓦斯を發散して敵を切ぐなどは其原始的例を劣等動物や魚類などに往々見る處であるが、人間に於ては未だ其事が無かつた。然るに今度の戦争には獨逸に於て、それが實行せられ、單に氣體瓦斯のみならず、更にこれを固形體に變化せしめて「コール瓦斯」を造り之を實戦上使用したと云ふに至つては「意外」の數に加へらるべき價値がある。尤も此事は已に吾國へも報せられ、同時に其豫防具などの寫眞さへ新聞雜誌の紙上に紹介せられた程であるが、其豫防具が又吾國古代の「甲冑」の如きを爲すに至つては奇蹟であつて此世年らの百鬼夜行を現出した。夫から伊太利の「タンク」の工場の如きも一風變つた者である。昔二國時代に孔明が種々の戦術を發明したと云ふ傳説があるが、今



度の「固形兵」や「陸防甲冑」や「タンク」の如きは幾分それ等を思はしめる趣きがある、苦き一合の苦しき發明だけに、其趣向が...それ意外ではないか。

九 海の方角を見ると、海軍の艦艇の... 逸は又己が軍艦の跡跡を晦ます爲めに霧のごとき瓦斯を海面に吹き出す工夫をして、英艦の追跡を免れたともある、此海軍方面を細かに調べるならば意外の事がある、  
日本軍が歐洲の戦線に立たず、いから敵味方戦闘の間に行はれた意外の事が、あつてもそれが日本にまだ知られて居らぬが、講和が成つた後には色々分つて来て驚く様なことが續々現るに相違ない、此歐洲から歸朝した公使の語に據れば、獨逸も非常の疲弊で國民のすべてが營養不足の結果生れ、其の多きは不具で有ること、又今度の戦争で敵味方共男子が大部分になつた、多くの國々は女人過多と云ふ有様で、これ迄男子の執つて居つた職の多く女子に移つた、戦後男子は職を得ぬ爲に婦人とら當分男子は職を得ぬ爲に婦人とら當分の争闘を起すであらうと云ふて居る、尙ほ近日の新聞にも見えて居るが、獨逸の良家の處女は貞操を失されたを前皇帝に向つて提起したとある、これは、兵士が戦争の常として敵國の女子を強姦したと云ふのは全く違つて手を生ませるために獨逸が特に手當り大に婦女を戦線近く送つて兵士に御馳走をしたからであつて國民が追々減じて行くのを補充するに必要の事とは言ひながら、文明を鼻にかけて居る國士に於て、此事あるは意外とせざるを得まい。

一〇 此他經濟の方面に、てもよく調べ見たならば、意外の事が多々あるであらう、差當り一事を舉げんか、物々交換と云ふことは經濟學者が原始時代か或は野蠻未開の處で無ければ見られぬ様で、

て居る現であるが、今度の戦争に就て見ると、此の文明の世の中に盛んに此の物々交換が行はれた、即ち戦國の間に介立して居る中立國のごとき、例へば東西や諸國の様な國では、強國の強制で已むなく種々の物を交戦國の用に供した、其の結果自國の食料が乏し上流社會の人でも追々衰弱する様になつたと云ふとであるが、斯うなると金がいくら遣入つても命には代へられぬから、自國に必要の者と交換するでなければならぬ、現に物々交換が事實に行はれた、中立國に於てすらそうであるから自國內では勿論の事と謂はざるを得ぬ、是等は當然は當然だが廿世紀に於て斯る現象を見ることは思ひがけも無いことと云ふべきであらう。

人々から、それ、が、意外とすることを聞き果め、それを追々紙上に現されたら讀者を驚かす感ぜしむるばかりでなく、教訓にもなり海に有益なことであらうと思ふ自分は今僅に其標本として、勿卒二三を挙げたに過ぎぬ、それ、の専門家に云はせたなら人を驚かすること意外の事が多くあるであらう。

### 伝令

全歐戦争と云ふものは多くの場合帝王の一種の野望から起る譯のもので、今度の戦争なども全く獨逸カイゼルの野望から起る事か發生した、野望ならば各國共に専門の武人が戦争をするのであるが、今度の歐洲大戦は全く趣きを異にして、眞に國民と國民とが戦ひをした、是に於てどう云ふことになるかと云ふと、窮極する處國民を擧げて戦ひをしやうとする國が提つことになる、即ち此意味からすると佛國や米國の如き共和國が最後の一一人一迄も戦ふとに依つて終局の

月桂冠を得るようになるのである、そこへ行くと獨逸の様な君主は帝王の命令で動くのであるから國民の意志が少しもそれに背く傾向があつたら戦ひが出来ない、現に露西亞の瓦解の如き、又獨逸が七八分通り戦争には勝つてゐるに拘らず、威下の盟ひにも齊き結果を見るに至つたのも、凡て此理から来るのである、實に此點に於ては佛國西と亞米利加は好個の教訓を世界に與へた、言ふ迄もなく佛國西國民には強い敵愾心が燃えてゐたからではあるが、國民一致協力力を極めて戦つたから勝つてゐるに從つて其力を増て来た、アメリカの今度の態度は更に「國民の戦争」の模範を示して餘りあるものであつた、彼ん徹底した道り方は命令ではできない、國民それ自身の自發的精神からなくてはならぬ、利だとして同様で結局國民の多数を占めて居る労働者を代表してロイドジョーヂを起用せなくては此

古の戦局 切掛け には戦つたのである、即ち語を換言せば、國民の意志が勝敗の決を示すことな、それから今一つ注意すべきことはこれ迄は文明が進めば戦争に弱くなる、即ち智識ある者は戦ひには弱いとされてゐた、少くも軍人階級は外國でも吾日本あたりでも大抵之を備へ且主張した條であつたが、之が又斯る誤りであつた、戦争は矢張り又或る國民が強い自ら戦はざる可からざる理由を體し、國家と自個との關係を哲學的に了解し、然して一身の勇と渾身の智とを傾倒し、國を擧げ、我々に從ふ、其國の強き鐵石の如きこと、今度始めて確實に證據立てられた、尙ほ終りに臨む一言を要するは、獨逸の敗因が武人外交にあつた一事である、若し武人外交ならば、英國や米國を眞逆敵としなかつたであらう、左すれば獨逸は結局勝利を得たかも知れぬ、例のミリタリズム本位で、武

人が權機を握り、何も數も武斷的計算から無茶なことを遣り、先づ中立國の白耳義を信じたから、英國から、矢張り亞米利加の船を沈めて米國を怒らしたから米國も起つた、武斷外交の危険であることは今度の獨逸の失敗で著々現れた、これも彼も皆よい教訓である、自分共は青春時代に余翁島流しの史潭を讀むでひどく興味を感じたものだが、それよりも幾百倍なる戦争に出遇ひ、奈翁と同じ運命のカイザルを見るなどは、實に意外中の意外と謂はざるを得ぬ、(完)

○嵐首の陣  
又乗し寸珍冊  
子、目録三行も  
は、一八家秘教  
飾ありう丸を  
五る程の首の  
収取時年を婚  
入のそのをもん、収取他の一  
ハ家者目録も、んを之を  
を始り先及の千を今ゆる字  
字の圓も、新中自今りヤ  
以、二考き、了、新冊の、終



草紙を七冊のそと、巻巻に家蔵の印譜の文を一冊の  
 目錄、此巻の巻巻の巻巻に刻合に多きもの  
 二冊の目録を心の方便利なるもの也、外に寸珍書  
 目二冊あり、えと合する日録六冊也、(右巻開を  
 得て方画目録を七巻めんと欲す) (一月十日記)  
 〇日々のもの通し、毎の五六行を獲てこころ、敢て珍  
 本と通し、あつたか、造つて物に記するものとのあ  
 り、あつたか、中、真味と感するもの無きこと  
 七巻、今新を得たるもの、由四五を考へんか

一 米井地手稿文行

一 善西撰手字詩行

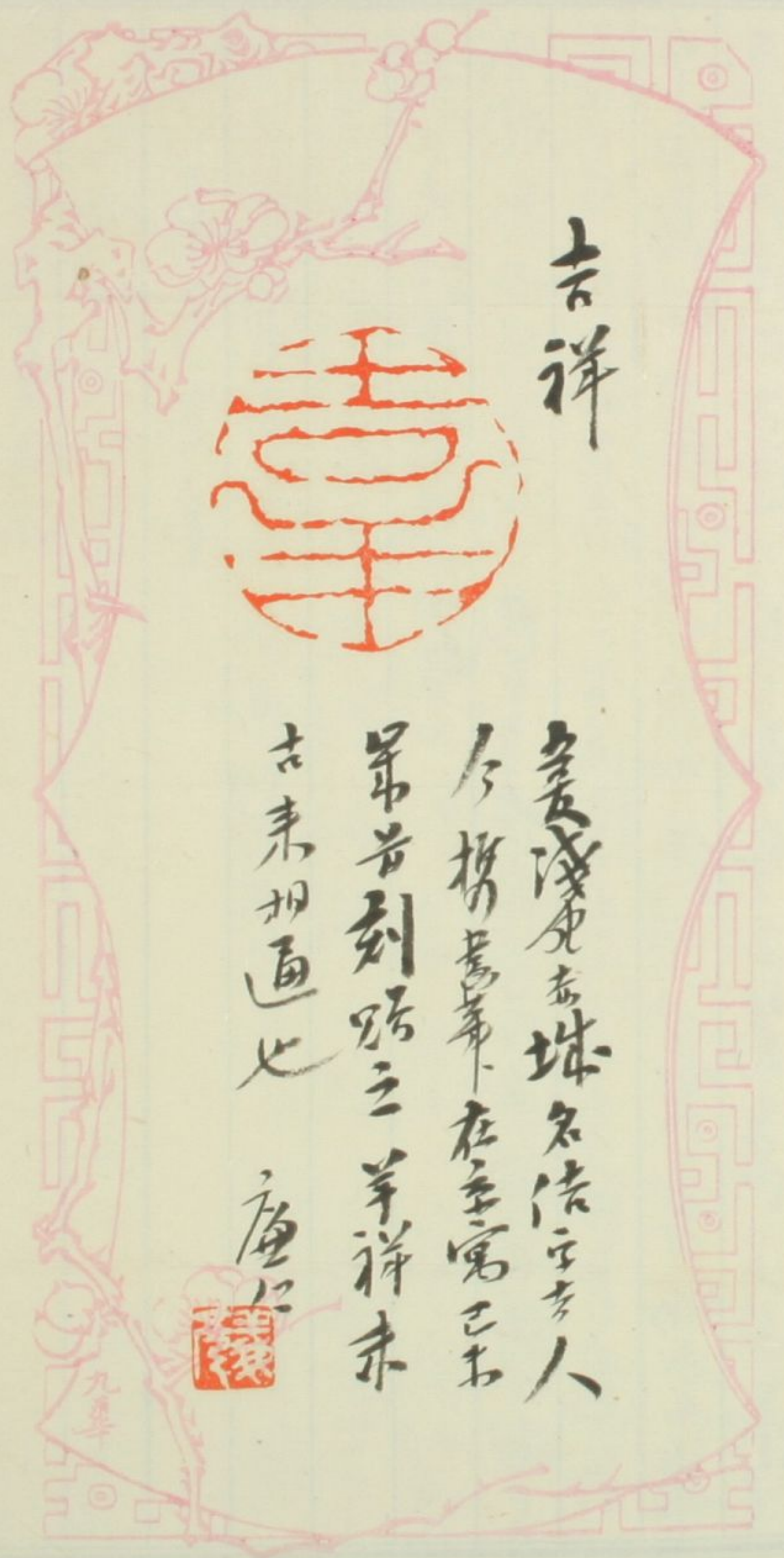
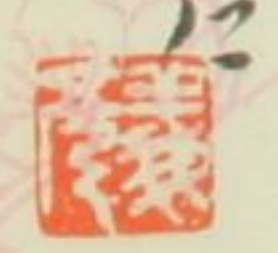
一 流字を二湖内あひ傳

坊城文流字

吉祥



善西撰手字詩行  
 今撰善西撰手字詩行  
 常若刻語之吉祥赤  
 吉来相画也













言匠を命したるに、光琳と工挺の唐墨を磨し  
果して、此れを及拍入深の二見の墨深中、  
地のことき、このを伝へて返し、中打之んを  
多也。墨を塗ること、らんば光琳、  
と想ひたるか、ざん、衣類、  
ん、を地と思へし、を誤り、  
墨中、  
繫、  
觸、  
と、  
あ、  
の、  
初、  
良、  
南、

覆刻の書体、氏傳三十冊を、  
藩侯、  
七、  
形、  
七、  
四、  
命、  
嶮、  
韓、  
北、  
半、  
式、











○吉物造り七堵勢ひさうりくじりまゝ、付行反校  
正の六國史(甲冊)に珍しく、古冊十数枚の間に  
せえ、ヤツトのさうな抄しある浅倉屋に偏り  
まうれ、此を印辨する印をいふか、中果  
本にけい、神話があるさうさう付行反校  
一此を唐をいへるさうさう漢り七のさうさ  
四十冊の体勢、一室一室さうさうさう  
此も物さうのさうさうさうさうさうさう  
四の山を方店と校するさうさうさうさう  
二冊とわい、胸をいふさうさうさうさう  
乃無の、此を映字をいふさう、さうさう  
のさうさうさうさうさうさうさうさう

あはえをいふさうさうさうさうさう  
同じち店を本さうさうさうさうさう  
漢さうさう、版式、のさうさうさうさう  
さうさう、の冊をいふさうさうさうさう  
新入とさうさうさうさうさうさうさう  
物さうさうさうさうさうさうさうさう  
比價、四十五、四、

五本の海、いふさうさうさうさうさう、  
五本、三、個を漢文、いふさうさうさう  
総計、十一個とさうさう、

○支那の元所記を漢をいふさう、付さうさう、  
目：福んさうをいふさうさうさうさうさう



















しこのを自分の事便であることと云ふはさういふあめ  
宣教をそののころの論争に準備するといふ所  
の大義なるをその出た事謀るべきと云ふはさういふ  
所をその美修約の上と云ふはせんは條約に三回  
と文讀するまゝの直らに擧げざる可く云ふことと  
の云ふ事ありて、準備の事無に物を言ふ、教を  
宣せざるを得ざる事、あめ日本の軍制に獨しを  
買冠り、結ぶめ何なることと云ふ事も獨しを敗  
れしと信しをさう、這う獨しを不抜の狀態に  
陥りては、染毒の決して此軍の去、城下の事  
と云ふ事しといふ事、恐るる事、染毒の軍は軍  
と方面の事見えざるこそ、後を心懸る事

獨の四境、肉落する事ある事、一年を交へ  
得へし事を言ひをさう、位せんは獨の所防の早  
うしと現し、染毒の皆、契教するし、獨也  
染毒の世獨、病に罹り、順共又主を去るに  
り、是しあめの内、北の世獨、病に罹り、病  
を宣する、ことと、毒、病に罹り、病に罹り、病  
と、獨を、病に罹り、病に罹り、病に罹り、病  
を、獨を、病に罹り、病に罹り、病に罹り、病  
目、獨を、病に罹り、病に罹り、病に罹り、病  
を、獨を、病に罹り、病に罹り、病に罹り、病  
と、獨を、病に罹り、病に罹り、病に罹り、病  
口、獨を、病に罹り、病に罹り、病に罹り、病







又舊航路七帯往を外れ七帯終、ジノガリの航  
道をより、任緯方の如く、所病伏る如く  
るうらむ、終るも、方もあるべし、海士の英名、  
ロルト、モルトン、海士の好意を、し、秘島を、  
その甲、若、若、道、不、と、限、る、と、お、う、し、  
方、眼、を、後、ら、ん、た、る、が、海士の親交、を、  
國、ス、一、大、平、の、甚、多、を、食、り、日、を、  
後、こ、ら、し、遠、く、に、醒、覚、し、一、齊、に、軍、需、者、  
物、を、送、り、あ、り、こ、ら、し、を、言、う、エ、う、其、の、  
其、の、工、廠、の、大、親、換、る、を、一、等、を、  
行、つ、た、る、海、士、の、所、在、中、講、和、の、  
海、兵、京、の、缺、表、の、物、預、定、前、こ、し、こ、と、  
十二

の中、一、デ、モ、ソ、ラ、テ、ツ、ク、ス、  
七、一、例、と、し、三、の、  
王、の、出、て、い、い、  
衆、の、最、初、の、内、  
ジ、オ、ー、ジ、と、呼、  
す、。 駿、王、七、  
移、り、し、の、其、  
リ、ット、と、の、  
の、か、の、と、と、  
二月三日記  
○五、八、湯、丸、す、  
一、海、く、行、  
り、序、を、徳、



悔し終る余の志と雪の来ある。本方半日一志の  
身内りちと押さひたるもの随つて因のなる  
皆紙巻を弄りし著るを柳拵す。余も亦著  
あり何れも著る所の伏魔殿を暴らさう  
し、何れも所る心あり列傳を次せしやと詠り  
たり一福と云ふせり

(三月廿九日)

○五卷の北城詩話未善の印刷漸や日終んとし五  
卷余る跋文を徴す。余北城に於て三十餘年を  
りて其の靴を踏む所論あり。業下委曲日を尽し  
殊：著者の苦心、北城文藝の歴史を細説す。今  
跋文と云ふは、是れあり。北城の事、余へこそ  
あり。仍し其の目録論を文とす。巻尾に附するこ

とあり。北城の全文又三十数頁に及ぶ。其の著者  
三十餘年苦心の結ぶ採集なり。北城の採集の目  
録あり。長きるる。この北城の出版の  
業を幸とし。要する所十数頁を附す。之  
に著る。北城の事、二十頁の長文也。其  
の北城の事、北城の事、著者の苦心を  
この北城の事、北城の事、北城の事、北城の  
行の著者の論論を、著者の苦心の事、北城の  
細説あり。跋文を附す。巻尾に附する。こと、北城の  
一也

(二月廿九日)

○此の半日、徳川邸に、同者協会の四月の大  
會にあり。其の事、遠路殊：奇蹟也



津藩けんとかれを承るる事、各藩をいつものと考つら  
候に、新設の幕府内、新設の内、設けらる。熊鷹隊  
和の藩を各長位助満ち候の通り、おまを義とせ  
ば、谷を大のり、大橋田者候長、新設して初め提  
出する大倉の御案内、城谷海の元候らま、棄  
るん、余らま、いろうく、修正す、プロگرام中文部  
大臣の訓示とあるを、税務の改め、府邸より市街の  
税務を別し、とる、と田舎具、とらあ、こゝん、刑を  
し、せ、と、和後の大倉の、執向、と、何と、廉之  
ら、と、ことらま、と、雨も、と、す、感し、式場、と、平  
和後の田者候、の、は、改、と、つ、と、一、と、主、を、決、決  
す、へ、く、ま、政、を、総、裁、の、演、説、を、教、断、す

へしと、投、獄、し、と、す、と、せ、ら、ま、の、一、の、決、徳、川、侯  
御、招、け、の、お、ま、の、早、編、の、の、田、者、候、長、と、義、と、考、大、浪  
侯、の、二、途、の、事、を、観、一、項、に、も、異、激、を、唱、ひ、早  
大、の、田、者、候、と、人、に、え、ま、ま、ま、と、す、徳、川、侯  
の、池、之、の、御、告、因、し、候、と、え、と、池、之、の、事、に、早、編  
田、の、侯、御、と、義、と、考、と、ま、ま、と、す、と、と、ら、ま、と、之、ん、と  
刑、を、代、り、と、い、た、田、者、候、の、事、に、外、の、事、を、と、信、り、言、け、除  
外、を、あ、ら、ま、し、と、こゝん、と、其、の、事、を、と、ま、ま、と、す、大  
倉、の、事、も、の、世、の、中、に、由、来、と、こゝし、と、一、の、を、延、延、  
と、と、し、と、ま、と、地、方、と、と、上、京、と、と、ま、と、ま、日、教、多、け、ん  
ハ、隨、つ、と、日、あ、ま、ま、と、元、ん、使、ま、と、と、ま、使、論、と、  
一、元、と、ん、と、後、の、





















山中... 竹...

存... 竹...

山... 竹...

古... 竹...

竹... 竹...

不... 竹...

竹... 竹...

竹... 竹...

竹... 竹...

竹... 竹...

竹... 竹...

竹... 竹...

示

竹...

竹...





此後一則一則一則一則

紀曉嵐曰、余嘗真董曲江言、大地山河佛氏尚以為  
泡影區々者、後何足云、我百年後、僅圓方器玩散  
落人間、使賞鑑家、指點摩訶掌曰、此化曉嵐故物  
是亦任誰、何所恨哉、曲江曰、君作是言、名心尚  
在、余則謂、消滅遺日、不能不傷此自娛、至我已非  
存、其他何有、任其飽盡鼠香泥沙耳、故我昔  
無印記、視無銘識、政如好氣、解月勝水名山、偶與  
我逢、便為我有、這雲烟過眼、不復到為誰家物  
矣、何能錫瑞題名、為此劫、所見尤脫洒也  
吾心吾意、吾心吾意









五十年行

大正八(一)己未(二)。  
 明治三(四)午(五)男。  
 近(七)健康漸增進。  
 (九)齡加減髭加白。  
 此際試述過去事。  
 誕生之(三)夙失母。  
 十一(四)入漢學塾。  
 醜漢被慕遂出塾。  
 欲入大學豫備門。  
 卽廢醫學志文學。  
 爾來獨習又著述。  
 初入新聞在京都。  
 轉博文館從編輯。  
 此間外遊及二回。  
 加硯友社已三昔。  
 自宅別興木曜會。  
 办伽文學新起業。  
 別立演壇作御嘶。  
 文部囑托編讀本。  
 三越顧問受依頼。  
 俳諧元來其所嗜。  
 自幼(三)時好繪畫。  
 下手橫好自揮毫。  
 未至銀婚有七兒。  
 罹室扶斯長在床。  
 遮莫厄落無事濟。  
 三十七八(五)役際。  
 家父逝去辭世日。  
 樂天主教見遺傳。  
 曾爲失戀無執着。  
 號樂天居樂轉居。  
 父亦午歲爲記念。  
 去(三)畫馬建馬屋。  
 今(四)羊亦緣筆紙。

大正己未新春

痛政

小波巖谷季雄稿

平和克復第一(三)。  
 怡達人間五十(六)。  
 無病息災迎新(八)。  
 元氣不讓他壯(一〇)。  
 豈爲虛榮飾晚(一二)。  
 里親被養五六(一三)。  
 塾中屈指美少(一五)。  
 轉學獨語七八(一六)。  
 故意落第殆每(一七)。  
 實是憲法發布(一八)。  
 公處女作未丁(一九)。  
 擔當文藝滿二(二〇)。  
 勤續二十有三(二一)。  
 獨逸二(三)米半(三)。  
 當時社中最若(四)。  
 每週開來廿五(五)。  
 創作翻譯既幾(六)。  
 各地巡講忙(七)。  
 供用小學各學(九)。  
 丁度兒博開催(一〇)。  
 時臨運座交老(一一)。  
 就中錦繪愛芳(一二)。  
 不學松(三)又景(五)。  
 總領息子已廿(六)。  
 四十二歲大厄(七)。  
 更得三男其翌(八)。  
 大捷(四)爲大凶(四)。  
 遊戲人間七十(四)。  
 暢氣性質逆取(四)。  
 不算未練死兒(四)。  
 轉々十回約十(四)。  
 採集馬物十三(四)。  
 千枚畫成四半(四)。  
 願是硯田大豐(五)。





樂天士進良學塾  
 十一 入莫學塾  
 璣主之 凡夫母  
 北烈篇 敬盛去車  
 儲賦 賦豈賦白  
 浪 對浪漸會豈  
 即寄三 子 畏  
 大五人 与未  
 正十平 計

謝家世寶錄 卷之三  
 整中風計美少  
 里縣齋養正六  
 豈益 盡榮 齋刺  
 元 寂不 齋 齋 齋  
 無 寐 息 災 敗 滌  
 合 齋 人 間 正 十  
 平 味 京 齋 齋 一

○使の梅をの宴を繁環綴云々

中井履軒か通法ハの訓懲云々を北記云々  
 此のち浮平盛衰記太平記ころの人を  
 一と余た侍のころの人と倣なうころの侍を  
 尤も批致云々後云々し前世のことを古  
 す云々んこの訛有るかろ云々 勅の師の外史  
 のことときハ平家ハ平家、南北朝ハ南北朝  
 え忠天正ハえ忠天正の武士云々云々云々  
 とう良史と云ふへきこと也

外史ハあめの子体源文と云ふへし 山物の善相云々  
 云々云々云々



○芝の二脚と云ふ人の文選備考に遺蹟保しと  
云々南葵文存に相傳し因事後田人其の海  
説を聽たす。余此に出米子五人とて  
行村宗人を老いし聽く。其の行村  
の事り報する所に傳ふ人の事り委しく  
油心あり故時よりしそんり左の大海を為  
く

(二月十七日 録)

支那の程七文選の在本の事李善注より  
紀より北を日唐以前に改に二匹なるの唐  
の五臣注文選海布し。此の五臣注  
ハ李善注と云換し。其の中の一は謂ふ油  
ハ舟を改むる也。此の五臣注ハ唐

ハ出米の事もの事んハ本海の事なり  
あり。○何れハ五臣注を出来たるハ東坡  
ハあり注に及んたること古く遺事を唱  
し。其の記の事宋より本海に入ると  
し。換ふる。其後六臣注を善注の事  
来。このこと五臣注と本善注の換ふる事  
注を元り入る人何て混濁をなすらん。此の  
七海布し日本海あり。世に此の事  
ハ六臣注より外に六家注と云ふ事  
何んも本善注に及んたること遺し  
文選ハ支那の程を考へに海布し。此の事  
單に注に程よりし。今ある事多き事







句又選らししあるは何ぞのくまひし 國傳の  
研究も参考あり人々も皆之を好むよし  
あるは世の事とする所以に解説ありまは精確  
をも例へば椰子：下しき説のこころ  
日の推移を名と名も多し加くうたせしむ  
の細説を興へ人をして好むべし中のある  
と云ふ

其の日に較ゆえに極の日本海軍の和歌又選は支  
那版を：比てんが復に傳へんとす、又先稱れ者  
其子に度年とるるをよるゝ由ることるん  
の今作ハ朝余ふす珍をを集ある例へば板を  
きよあひみのこゝろ冊に勝る事と云ふ、其のち

二三冊手傳いとらふは後にも二冊子四冊を  
ふ、敢て自命をいふを言ふは、  
七をとりしが、  
此は寸珍なりと云ふ

一 徐而庵の詠 一冊

一 東坡十八羅漢歌 一冊

冊 王世貞十八羅漢偈 一冊

一 古詩 一冊

以上界紙本  
以上古今心古詩と余題あり

一 他列條綴の五毛紙冊子をせむ打  
の書流るる、  
句選を言ふ







女のとうらうり京都細川者居るに右指のうし、竹  
俣と聞かへせ見ると十二回こと云ふ、さうして云の  
ちよんあつた心癖へちじ又ぬ

○中井家不為の遺印を尋ねて尋常尋常指紋に托  
しあつ、いつかや一説をいしことあり、教りぬるも  
深心あんとて、しと珠をすへき、女の目あつた、唯  
海衣の刻家大いそふらうし印杖を言ふ也  
刻を伝頼するに、結々印面を清く入る、日本名家  
の刻あつたものあり、あつた之を磨礫し去る  
忍びす、較る在る者、薄く鋸をいひき断り  
之を他の杖に送りつけ、保蔵するを尋ねる、  
陸奥の地、此類のものあり、  
印人遺言中

此類 ~~...~~ 所謂の勢助のうききと  
んど、印人の心づけを存するなきこと、思はる(二  
月十五の録)

○安田義一ゆ不亮の本朝現在古目は狩谷極  
高の千鶴本より例の遺書あり、正楷のうき  
派をよみしあつた、あつた心癖へちじ又ぬ  
此年、少川の問答あり、清く入る、勝るあり、  
あつた、ゆをいひ、あつた、あつた、あつた、  
の全部(十冊あり、あつた)を、瑞瑠の附  
し、同好の欲せんとす、のうきあり、あつた、  
あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、  
の形、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、



○元本既存冬の暇に接書録せしものゆゑに二巻六冊の行半束内八冊程比紙は報の揚敷を脱ぎ、口授の字あるんじか中し古し煩し、とてその唯るんハ届中一うゝ二つめ分紙あり記せしり、そのあり文人と旅行と云ふ題下、あうし文人の旅行と記せし中、記す文人の多きを記す此の題下の既向う、文人の記の中、あう記す、材料あるもの左の如し

- |      |      |      |      |
|------|------|------|------|
| 池大雅  | 高其若  | 韓天壽  | 春木南州 |
| 江村甚  | 足代山洲 | 巻其若洲 | 杉崎慎庵 |
| 狩名植尚 | 山梨福川 | 柏如亭  | 木其若  |

大窪清 頼山陽 大田富山 河内成興  
 素表集 春其若 海邊其若 利良亮  
 ○家蔵飛騨本印譜二集一帙あり、ぬゝ不堅の飛騨本五帙と花と名をも示極むるが、偶々元本あり、三集四集あり、家蔵の二集と保せん、と欲し病潤を病、乗し試み、然るは較す、寸尺は大小あり、唯三集は寸尺あり四集各家より打ち、皆嫌ひ、元本を三集を、追て全部を、人ことを期し購入、家蔵に初集七八巻あり、元寸尺大なるを、遺域とす

此本二帙二十冊の交、二十四枚、傍るゆゑ

二月十日録



購入

○坊間青伴とて治告志一冊を購ひ得て加書中  
置るべしと先田杉蔭抄録の注釈とて杉下齋  
の刊版の傍に余の年の次此書を得しと云ふ注  
記ありしよし也今四十餘年の今このわたり  
もかゝりぬらんや思ふも自ら居るを乞ふ松  
蔭抄中抄抄録のしよ書物と云ふ抄を許  
さんらん其後此因中抄を許す所と  
り、注りするに改次と云ふ風書を挿む、  
當時の國士間の事と云ふ横説と云ふと  
る所のしよ先抄の注と云ふと云ふは、  
一と云ふは、凡そ注釈は、凡そ注釈は、

般と珍しくしよ、唯れ横説横の注を其めに  
このしよ當時の時勢始のしよ産すし、  
し、益者安知の四字と云ふ、  
鶴と云ふ由、自序の由、余往年、  
下り、杉蔭と云ふ、差入を許さん、  
今心の注を抄して、杉蔭の注、  
做らる、唯れ横説と云ふ、  
入を得る、注のしよ、杉蔭の、  
多し、然んとも、杉蔭の、  
十書法す)

○冬服未流行感冒都部の別を、  
り、杉蔭の、杉蔭の、



染し一家教人枕を並べて寝たりてものめんす、自  
 分の印を人として日遊んたるもの況に十指を屈す、  
 誠を寒心すべし、人ハ痛く疲ると云へハ我慄し  
 て之んを治くる海々々々、之のち人甚憚んが如し  
 其の埃塵一塵に信するものあり、余々の家七世年  
 来此の時疫に冒せん幸に皆全えたるも尚休  
 むを戒を恙とするものあり、斯る折る北堂重患の  
 報の里を列る北堂の病の中、忘るは此年  
 一月のよかりし其後此快に転きたるも再びありし  
 氣をのりてと容態悪ると、丹 心 の 極 に  
 (二月十七日の記)

○公卿人一一し、世宗の刻の印を歎然とす、此

文云平、凡：



木 章

木のり、字人歎と云へハ、林は宗  
 ハ、此のありて漢を多の聖  
 畫、うそも飯らひなう、極 に  
 刻し、筆をまを施し、ちう右雅

の執事、まへし、才也、印世宗のありて、傲  
 ぶ、乃夜、深く入り、又印法也、傲よ、あ也  
 ○穢多の族を、車 に 載 せ り て 行 く は ず と す べ し と す べ し  
 の族を、社名とて、遠 断 し て 特 殊 部 族 を を て 呼 び 之 れ と 交 り る を 屠 し と せ る 風 ある ハ 後 漢  
 皇族の平、存論、漸く、先ん、ちう、今日、の、極 に



















くも美作 噴泉を以て得るものと云ふは  
後藤のせいと云ふは、謀心細きなり。

この道方より扱え 新築の二階に一行  
し、その間にあつて一行は、酒量も  
十の頃まで飲めて余り、道邊に  
のこころを互に、積り金を、  
道邊の古者、豊田の錦織を、  
扱けり、と云ふ、二代豊田、  
海岸を、と云ふ、今の、  
果る、所あり、古者、  
けり、一、執向、  
七、扱、え、と云ふ、  
十二

版の圖を、  
巻を、  
の、  
海、  
扱、  
二、  
熱、  
未、  
二、  
用、  
流、  
海、

熱海に二泊して由來す、  
未だ、  
二、  
用、  
流、  
海、











一と是の巻尾に日本外史の終りを記す  
終り一冊又の終りに由來のありんことを考  
体と見えん少陽自筆の終りと思ふなり此  
の外まゝのまゝの終りと樂家の終りを記す  
ち山物に就くはあり

○今傳へては物印と題し印を左の如  
くありはゆめも是の如く見えし作のれ中のとす  
連の二つがこなる為度印とすし  
余の家とありぬの如く見えし方中  
へてありしものとす今傳へては  
の偽化とやらうす時とすこん入母  
と一文字

二月廿三日記



文曰道遠入

正平刻

蛸貞守室

小室書















9 (二月廿八日 卯 志るま)

○三月二日 昔散策古塵と幼のそ一二の方を  
得たり 一唐本寸珍宋元詩百一鈔各四冊 和  
刻宋詩百一鈔の原本也 日本入のものと元詩百  
一鈔の西場刻あるを兄より寸珍文庫に入らん  
可也

外に唐本一冊克徳年官刊もの所三種の潤  
注を収むといふ素世は曰く玉唐秘決曰く潤  
玄子 玉唐潤玄二情我丹波康頼醫心方  
書に披つて此の由也 此書永井本原の懸  
危多為記あり、余の知を兄より所 價甚此也  
し

○銀子に吉田の終焉の碑を樹せんを此以  
換文の河内よりまひ近みたるかホ名文の志を  
おすこととらうく 困難を物也 物也 物也 互  
させし見もおせしるゝを、る一二回行を  
要へせんハ 物もるゝをせんハ 此行唐紙も  
あつゝゝゝゝゝゝ 散後もおそむをねめおく  
此の碑一文の字象類ハ 高橋義彦中なるが  
を以て玉換文と考へ 成族とる人なることを  
めん余換文を揮ふ 荒らし、 亦家を炊ハ  
さぶつる也



終焉碑

政

文學博士吉田東伍君  
 於千鈞子一夜病革  
 然逝實大正七年一月  
 廿二日也嘗論刀水治  
 華後終於其淵似有異  
 應因門人故舊昏謀樹  
 石傷其棲神  
 表之紀弗護也

撰文者、名ヲ署セサルトキハ此之門人  
 手ニ成リシモノト後人ハ見ル  
 テシ若シ然ルトキハ本之門人故  
 舊トアリテ就中一門人ソ、主  
 十ハ、君ノ子ニシテ先生ト為  
 何如但此ハ、都合ニ依ル  
 此ニテ入レテ文勢諸君  
 縁 何如  
 因、子ハ昏謀ノ下ニ有リクニ  
 乃、字ニ為サハ更ニ佳ナルニ似  
 タリ何如

謙安讀

改五峰 身泊る自改心を以て其の  
 増字委曲を盡さんことを求む五峰  
 流して稿する所の名左の如し文中  
 信宿河加久二川の所こけ長しと云  
 ふこととせ出費地をあらわすとせと流  
 水の東木の淵源あることを云ふ、故又  
 文の似て流るる也 鈿子の也 是後  
 右城立るを言ふ也 此無けんハ有異  
 意の也 海利、さす、これらも一の世を  
 文意のいさむ、然せざる所あり、尚、鍊  
 もある、前文に比するハ三十紙の増字  
 るんも碑面の都合を考ふる増字を

幾生二斗

惠壽月成丹



要事とよみ

(三月四日記)

文學博士吉田素任君。病遊  
鉤子。居一日。暴卒。實大正七年  
一月廿二日也。君生長信濃所  
賀二川之間。及見刀川。頗有  
會心。遂留意治水。著書論  
之。而未見其朝海處。鉤子  
之遊。蓋債宿憾。而終于此  
矣。門人故舊以為有異應。  
樹石表之。

○三月四日。坂上五峯。日里孝平と田端の自  
笑軒に飲む。酒次五峯。此心と示す。















落井小蓮前年一也。為ある十勝と隆ひ且  
 つか記を作ふ。即ち其の印刷に附し、其の  
 と經る左に収るるもの即ち是也。  
 余雪也。星望城の事也。河の、雪をそ  
 自分、時田重禮の門人、今も其の也。あるを  
 禮下谷に任す大由誠の道場其の附し、  
 あうとう、一日時田の宅に、星望城の時田  
 八郎に星望城の字號を稱揚す、是抑に  
 早命とむるの端緒、是成辰の年の星望  
 城後、此物とんとす、其の三四歳、其の中  
 記、其の事、其の文、其の事、其の事、其の事、  
 此自分、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、

入頁美氏主皇古十券卜已

暢神泉

井泉滾滾。飛玉散珠。試掬之芳冽暢神。頓覺清風生兩腋。不必須玉川七  
 椀也。

紅錦坪

江楓一株。大可合抱。枝葉茂蒨。重陰宜夏。而秋霜一下。紅黃爛斑。織成七  
 襄。知是君家秀才。占魁歸鄉。

大正五年十一月

小蓮山人 薄井龍之識

箕山亭

奇想婦亭。蓋樓臺山。雲飄猿嶽。立學天。巨靈破斧。肅然觀我。  
 箕山亭。

好古二秋考正







芳井の蓮前年一也(一) 乃ある十勝と藤心且  
つた記を作ふ、即ち其の印刷、所したるもの

香井院遊峯否

春車闌珊。將李橋林。林扉一。蓮。瀾。圓。型。崖。露。成。懸。如。山。照。水。昔。聞。音。人。

遊。首。干。竿。土。干。雲。霄。蒼。翠。入。巖。懸。懸。風。香。燭。令。臣。帝。讓。冒。燈。懸。

半。燭。平。地。八。尺。劉。縣。否。面。銀。霜。諸。隣。與。丹。各。公。使。置。是。留。天。賦。間。

耳。琳。破。將。是。林。參。天。帶。劉。此。懸。懸。雷。風。更。前。懸。林。至。黃。位。鼓。對。奏。幾。天。藉。坐。一。即。

八更美丑廿雲風十觀心信

分の家人格をて通行すんハ便利ありさるる  
又自分も頼りませりさる。格をて自分のも物  
を扱はるる。花義をて。聞不しく七西創を  
も。通をて。は。ん。と。自分と。早。命。の。海。の  
関係を。と。注。を。

○李の初め方名。二二三の数を。を得

黄葉如論。此字。得本

閑居を。生。没。子。を。人。の。ち。の。意。又  
頃。の。若。く。は。幼。く。は。ま。政。を。し。今。り  
故。を。之。容。易。に。は。し。得。る。を。言  
本。を。

好古二新考正



亡友富山健由らて好古の暇希に日記の  
行各板を舊花とを不抄をう、此古  
小板を桐外、細書して誤謬を正し  
らるゝ易板をその不在を知らず、此古  
二板外注を乞部、勝言し、字との也  
あり、疑して好古二録を正と云ふ

三絶碑 拓本

山梨箱川の碑、杉崎恒吉撰又  
持谷板角のむろ、余此の拓本を  
得んと形して今漸く手に入ら

防路の古くもこの中、架中、缺く可らざるもの  
と記 (三月五日記)

他、画譜一冊と得り、

深窓奇勝圖 一冊

此古ある年間、方西園、唐か、深窓  
奇勝を記し、物あり、際、我、沈、道、法  
墨を描写するもの、寛政元年、文晁  
臨言し、梓に上げ、その是らるる

北本初版大也、致と云ふ、  
外、  
候、四、四、  
五、十、大

歌鳥画譜 一冊

十井井河、画譜、初編を版し  
柴翁の舊作、竹を花記あり、是音  
印人云、この序を勸、  
候、四、四、  
五、十、大



の余屋敷を蒐集し四十餘種を得たり皆莫大茶紙  
 類也而して其茶紙の倡始包仙亭の茶紙其器  
 多しく獲んと欲して然らず傷に合符の一余の  
 其何尋うの古を賤くせんとして寸珍冊子四五冊をお  
 ちり本り方成りたり一本を贈りしあるをせん心即  
 倘怪きう其屋敷に由らば其茶紙其器を余敢  
 し合符一本の如くせん其器を余に乞ふ此書を  
 得たりと知りて其器を乞ふて得たり此書を  
 得たりと知りて其器を乞ふて得たり此書を  
 無の可なり而も其器を乞ふて得たり此書を  
 せん合符の選擇一冊一冊とて得たり三月六  
 日

のある圖書を漁ること日課とす、毎の四五  
 種を得ると例とす、物と致すを得ると又  
 其器を乞ふ、合符の如くせん其器を乞ふ  
 特記を要する七の友人と無しと口書也、遺忘  
 一備へんがらん、二、又十日して十一のら得たり  
 二つ七二二三と注す

一横又字なる人一首

明治六年三月里川直一親の著  
 る人一首を其物字に綴りし事

其器を乞ふ、合符の如くせん其器を乞ふ

一吾屋敷

其器を乞ふ、合符の如くせん其器を乞ふ



の通考しを花子准と版本をえり  
く或のを得ずをふ得るをの取次十  
四冊の再版也

一 古原大全 天和刊 五巻一

一 浪華古撰志 天和刊 一

一 閑長放言 天和刊 一

一 春泉肝膽鏡 天和刊 一 春泉心

北四考皆珍也然や古原大全は其後更きし  
こと長し北考は二十回と雖も浪華古撰  
志又四回と雖も閑長放言は北に歌外  
一二の語を記す春泉肝膽鏡は春泉心と北に

の風俗を因りての四考は、影写の版の印記  
ありし也

一 琴弓帰童丸富文鈔 一冊

夏卯八黄中慧山の年をいふ事多く  
丸富を蒐集し其の根本を立りぬ山  
に示す山山の初めより四年あり前  
日考を以てし其の地考也北考  
長津丸富の因に洩んたるもの多  
く収ふ又同考の誤りを正せしむ  
うし

一 北山紀聞 六冊

元禄年間刊する所、石川丈山の詩



致のありたる評稿を載す  
此尾に其長徳の評あり 殊者あり  
と云ふも此者より得るべし

大正八年三月十二日記

〇複製局三月分記本の早稲田之原不長ハ大佐如  
本一冊ハ複製局上出来たり複製局の範として考  
るを得べし此頃坊々の複製局を以て後ある酒井論  
と嫌ひ居る者あり、複製局の之と比較するに  
係し其の複製局の式を以て其の面白き  
段即して一向面白き、粗と云ふ複製局を以て  
印して置く

〇余の四角をぬき、いざ實相の集巻を以て  
法す、其半高放の文、其味ありあり、此  
の書物通の集巻を得んとし、其本を得ず、  
此頃四十一年頃、又いざ其書物を以て出さる書洋  
装束といふ、此の装束の四角を以て其の面白  
にか茂真淵の評論を載せ、其尾に依り、其本  
の論文あり、信條の校訂と云ふものあり、其集  
中の其本也、此書は、尾に、其書も収む

又云くか茂真淵の集巻の面白き、其書は、  
彼の集巻より、其面白き、其書は、  
の千八本を、其田魚淵の購書せしと、  
と云ふ也















新

○一 唐本唐書 二冊

此本情あつて、尾一枚落す

○二 小蓬萊閣古印書 一冊 豆本 二冊

此印書羅振玉花印中のものを収む

大本中本の内録 一冊

六冊 朱字を交へたる

一 度金取勅府

一 度金取勅府

一 華橋大蹟

此書の昭和十四年、津本真刊する所、華

山概中、桂山、高野、方、岡、其、他

と収む、此を古今流布する、ことあり

○北州新報、楊威中、今、大森海海、七、四、十二、三

四、各、の、福、送、り、の、二、回、え、い、う、次、と、楊、威、を、記、し、

り、い、く、し、は、あ、の、い、う、の、い、う、を、流、す、者、に、而、さ、り、

新

と、い、ふ、は、北、州、の、海、軍、の、い、う、を、い、う、る、者、の、い、う、

の、後、の、い、う、に、い、う、る、者、の、い、う、を、い、う、る、者、の、い、う、

と、い、う、る、者、の、い、う、を、い、う、る、者、の、い、う、を、い、う、る、者、

の、い、う、を、い、う、る、者、の、い、う、を、い、う、る、者、の、い、う、

を、い、う、る、者、の、い、う、を、い、う、る、者、の、い、う、を、い、う、

る、者、の、い、う、を、い、う、る、者、の、い、う、を、い、う、る、者、

の、い、う、を、い、う、る、者、の、い、う、を、い、う、る、者、の、い、う、

を、い、う、る、者、の、い、う、を、い、う、る、者、の、い、う、を、い、う、

る、者、の、い、う、を、い、う、る、者、の、い、う、を、い、う、る、者、

の、い、う、を、い、う、る、者、の、い、う、を、い、う、る、者、の、い、う、

を、い、う、る、者、の、い、う、を、い、う、る、者、の、い、う、を、い、う、

る、者、の、い、う、を、い、う、る、者、の、い、う、を、い、う、る、者、















一 古昔の香

十三冊

田中ちの伯か内府を異性の懸殊  
を移し給ふもの也 贈るべきもの  
也 價二十由目

一 寛永火渡 一冊

藤原貞幹の火渡を底本とし中  
川道禮の増補し給ふもの也

一 金銀錢譜 一冊

寶曆八年古木昆陽の著ある不  
考 是處に藤原忠実の追補あり

一 年中行事

一 思ひより日

外に年中行事を別るものと通り荒干をいじり

一 袖玉町録

一 刀劍圖考

一 近句一足元

一 武の昔袖鏡

一 色目分

一 新刀銘書大全

一 裁縫早午川

一 樂焼陶家系

一 燧代衣圖考

一 文林貫珠

一 大日本史名称訓

一 秘書上人年譜

一 月令協抄全

一 章中拾遺集

一 在野書屋集

一 玉京集

一 かたがはあひ集

一 伽譜五元一説

一 玉川新記

一 花鳥曆

一 蕉門例借格お集

一 朝魚水鏡

一 桂園一枝

一 和漢考の集

一 本朝古方画伝

一 美談古画全集



以上并出種多々不為善事也此類寸珠不以此  
心更々種多々の可く種種あり種あり種あり  
○美春溫柔の四時の歌意を心う頼山陽之  
九十二詩を題してそのあるをいふ余の志  
画を心うその題の柱ありと云ふを  
元亨の今歌の心あり種ありと云ふ

溫柔卿四時雜詠

唐宮春首

三十六年外史の物語

誰向歲方流福未一渡牝杜漢十七催曆頭元

馬知何祥直自此育任氣開  
為命依然舊的取春空絲斷墮平其燕盡  
妖醜態君無天畢竟畫眉多吟狐  
蛇夢祥成脩禊辰滿柳人勝可憐人何如今  
日呱泣一醜為斯好合春  
離為出花從水粘山危夢冷杜鵑啼漫  
俗傳靈戒今曉身從何許生  
畫旗風吼舊干腮奪取三郎笛一枝真個  
後心還進一箇使將腥血灑準比五月  
片依裁成田比翼不從秋扇委篋笥為君  
襖甲期修志好伴鴛鴦付水湄  
紗絨旋轉似車輪天地錯行獨守心世上尋



常空畏影誰陸能者影戒其真 七月

桂瓦凝露月圓玉兔念香粉搗丹佳境偷  
言嗟逝死不知長命年為丸 八月

滿峽秋雲引雨落危梯心怪立松杪栗火墜  
地冢何様亦見秋又存佛心 九月

温来巾裏別乾坤云北常開衆四門一口  
冰吞猿走壳九年而聖亦銷竟 十月

雪裏芭芭蓮認忘辰右巫心匠至今新由情  
誰翻土名情佛世殺他家行脚人十一月

笑語相和杵臼聲一者為之信若為情好風  
擣入玄の裏氣眼陽和自此生 十二月

東の備本寸切法活多興圓多題塚に云

合法沈石張瑞圓二家草書 鹿園

此の各五口〇

此人の衆を別号麻以こととすこと即ち名款

こと初めし知るといふ事此人初めおる言書傳

とすひ花るといふ後東意と出ると山形家

とす精漸とす意大出東自筆其つらと

出つとすある久須美雨巾も有る此人を

此の事とすこととす此の事此人城に於て

此の事とすこととす此の事此人城に於て











中。唯又玉を以て養。旨酒甘肴。  
 盈衍其中。共飲畢而出。  
 九年安妃死。苾子忽焉。中者  
 以乃山。

頃

因の中頼本の典故とありしは南史齊濟王陽  
 俊の事なり

釣常。親子細古五行。却  
 为一卷。置中。中。以  
 清其珍曰。所の家名。境事。  
 後何細古子。花中。釣曰。  
 中。中。中。換。同。免。易。且。父。中。  
 可。知。亦。不。忘。矣。後。之。才。也。







老木の枝を切らざるに解んそんは此をてりぞと  
取らむ

○余才珍園方をとまき古家、もを余をんとして未だ  
直名をいへる前掲の如し、五山、余の如きは一書  
を三つ曰く、や精舎と申す、おぢと余初めを志す  
公才即ちこれと名とす、お物、二字、田能打、竹田  
今才、油集の序、や、こ出つ、曰く、大、而、粗、細、小  
之、精、五、山、中、竹、田、の、此、修、典、有、あ、や、を、や  
と、和、と、と、余、の、く、強、と、典、所、を、擇、め、る、を、要、て  
す、今、才、油、集、の、序、を、典、所、と、し、て、敢、て、好、け、な  
竹、田、才、珍、の、考、を、受、て、ま、す、於、て、余、と、い、ひ、ぬ、る、は、且  
つ、才、珍、園、方、と、披、お、す、ま、ん、今、才、油、集、を、考、ふ

に、今、才、油、集、の、考、を、受、て、ま、す、於、て、余、と、い、ひ、ぬ、る、は、且  
つ、才、珍、園、方、と、披、お、す、ま、ん、今、才、油、集、を、考、ふ  
と、ま、す、ま、ん、今、才、油、集、を、考、ふ

三月廿六日迄

竹田今才油集を特に四寸珍をこぼりし  
る所以を其序に云ふことと詳しうし  
今條を録し、寸珍味を、外、揮、す、曰  
く

斯集為吾輩、曰、好、士、編、録、非、大、手、筆、所、需  
也、故、此、冊、且、最、小、不、宜、大、更、大、亦、則、花、枕、画  
内、到、處、相、適、其、便、極、多、今、奉、一、二、曰、春  
書、秋、宵、夢、後、醉、餘、酒、困、病、倦、而、林、



層定決用櫃探厨之方、省喫童呼燭之援、  
其他尋花聽鳥、策馬放艇、爾時袖裡可  
買、杖頭可繫、顏士遠客、烹茶茗、浪酒  
爾時燈間盤畔、亦可放在、僧侶跏趺念  
往、爾時杖策內可揮、名姬綉花刺鳥、爾  
時粉盆中可貯、或有不同好士、一閱怒目、  
罵曰、此種公麼、何等無益之書、取而拋  
之、爾時輕、隨云、不使他淘氣費力、  
可留小之利、而使之極矣、

此回の本改味を解するに其の言ふ所を  
意を得ず

○五峰、病、神、湯、

て更なる意を満す三行別紙を以て姑く去  
るなり、ゆゑに子を録日、心定、

文學博士吉田東伍君病而道鉦子居一日俄卒實大正  
七年一月二十二日也君生長信濃阿賀二川之間日親  
煙波及觀利根川怡然有會心遂考滄桑遷移之迹兼及  
治水策著書論之而未窮其下流是道蓋非偶然而忽焉  
即終于此如有宿緣者矣門人故舊異之樹石以誌追懷  
云







の妻或保のちりる末小舎尾に持南父  
翁との親の跡を綴りて数に成り侍  
非其人云々の紀生(前掲)と存る  
しと具出さる

一 錦書歌道 五本 巻末

美事 数正故架中の珠と云ふ  
是

一 韻雅 一冊 寸珠

治事并新撰南岳の著る木比の  
韻上の物徹の音を以て字を集  
の又形を以てお徳に初なる二便  
しと云ふ

呼らへ○富田善くゆわの希る由の希る希と云ふ  
五三身く○目今くし稀公積おるるの希る希と云ふ  
協成し概ぬらる希る希しる希る希ぬる希と云ふ  
し中身の希る希と云ふと成る希 治次正田と  
るの希る希 概希自今寸珠を二粒片と云ふ  
一 伊勢お終一 非る概後と云ふ果あり七自由と  
まんか余の希る希と云ふ 概の希る希  
に概の希る希の目今と云ふ 概の希る希  
七の希る希と云ふ 希る希不化を以て希と云ふ  
し希る希と云ふ 希る希の希る希と云ふ  
し希る希と云ふ 希る希の希る希と云ふ  
の希る希と云ふ 希る希の希る希と云ふ







抄修の事  
十時抄の事の覆刻也と云  
：概の事

他に特記の事ありけり  
一と得る地の銅の事  
七の飛鳥の事

梅早 初梅

和洋の事 初梅 初梅

故銅の事

美言徳錦歌之物 上代徳錦の事

東萊の事 東萊の事

○の事桂の事  
大湖の石の事

いへ、密流の事、保冬掃物、石、雲を  
ある也、志山胡公壽、  
畫の事、珠の事

(三月三十日)

近來の事、載、盛、  
然、長、元、梅、  
唐、王、右、丞、  
師也

ハリ、梅、  
一、  
梅、











市下五る列中の若原屋瓦崎其葉者牙藏萬  
軸郵侯高漆湯衛陽王府荷

は後この中若原の砂をよと細方し其尾を  
田今又浦集府中寸珍を味味ニ及ぶ一  
節と採する若干の物類を存するも此之  
れを換ふるを要せり是れ其原の地記也  
○此の人専物次三上巻次の事なるは  
心算も其の事なるも家名を有す細人二病  
引く物に若原の邊者動キ取らざるにしま  
一此年此の山傍の物類を若干の物を蒐  
引し現るんと而倒の地記とす三上の文

のたえ<sup>早</sup>京債二十一日計りの事ニ對し其方圓を  
授じ、僅に内海と得たりと、此葉に比も初  
めは浦家なるをりしうづと此れ終る物  
類し、此は三上の後進を以て其の史料を  
遺傳する所を以て其の家姓未だ此の同物  
なるを利用し、三上の事あり種々のもの  
を傳りて其の終る事を知りて其の  
所は此の所以也と、此の夫人も其の子あり  
今、此の遺傳も出づる所なりとす  
○其の地理の志とす、此の紙二ツ切を  
此の初年に出づるものなり、前記の  
とも、其の好著なり、此の好著の



意の官印を以て材料と合ふに徴し中根  
香亭(叔)とて漏筆ありしものなり地理  
理解説中一姓の姓形ありの地理を説く  
而して官軍城軍の二字を以て軍軍西軍  
の二字の目を用ひしものなり西の二字を用ひ  
別とて官軍城軍の二字を以て軍軍西軍  
比深く善るる也城の二字常用せんとす  
断然之れを排したる一見誤り中根の幕迄  
さういふ所を之れを避けたるも信んぬ  
世と論事すんぬ物の一の符徴と呼ぶ  
不可なりあつたる所も少くも西軍と  
服を穿て見ん抗論せし中根の懸念すん

此職ありと昂然居るなりと島田三印  
の語也

(四月二日録)

○余多く印を病すも未だ印契を母有せず寸珍  
同書中又家系の印譜を四頁にんことを欲し初め  
て印契の小事も其要とす頃者人に托しん  
版の彫刻せしもの漸やく成る程外に紙版  
山房印賞の数字を刻せしめたるもの  
大々失しぬるもの三枚を刷りし後刪去んと  
す

印ハ小字の物をも特に造む一部印譜を乞ふ  
んとす寸珍を以て爲り余しは寸珍  
亦印ハ七通用す  
(同上記)











国史往籍志 十冊

和刻を古田の皇極寺に譲りし者  
入敷見す、此方今在りぬと云ふ者  
あり

公平内本論理札記

市立速尾自筆本を以て楷者  
正甚以正多但以紙を以て  
本多然れ和四印ハ其之  
缺く所を存ししと云ふ  
己完本と云ふし稀出  
巻と云ふ人歟  
概あり

豆本 伊勢抄

林方抄

此のものは... 伊  
律製極ありと云ふことと云ふしあ  
り

俣野白布子

各書に麻谷花者の印あり  
直江山成、麻布谷町に在り  
を方せしかあり此印ありと云  
因に興譲殿と云ふ米俣上杉  
家の二の抄あり

松尾の文庫ありや... の内 鷹の擬し



けいせい評判記

一冊ありあぬ七年の政を記すも  
とも立枚をどのものなる。江部傾城  
評判所十八大過撰とあり、人を  
笑ハせり島麻葉なるものなり

○今も十年前病後の大隈侯を詔の信に海行成  
り得りて三十餘年吐きだし今も衰弱いままに今も回復  
せしが併し元氣に既に回復し平和合戦（つと）英  
米諸西の甚比不台現るることを驚詫せしむ。曰く米西  
の日本も西國を迫りし時、鎖国の世界の大勢なり及ぶ  
ことを云ふ。而して今却りて人種おとろろす。すこん彼等

ハ今欲むを言決すもそのまゝなり。又云く人を殺  
すハ兵無くも因るにあり。政次も亦人を殺すは  
るる。このことを思ひしむ。彼等の利にせらるる。今ハ  
政次も亦人を殺せん。とす。種々のるる。人を殺  
せん。且つ口をのむ。西國の歴史を説く。人道の題  
なり。昔も日本も亦つる。ペルーの奴隷運送船を抑へる  
こと。米人う口を人三つを奴隷に爪哇を奪りたること  
ちもをる。けいせい評判の正義人道を説く。ヤクシーも  
そのる。い。勳力もい。ハ。今も亦及す。ことあり。而して  
のる。自己の利益のり。人。人道正義を蹂躪する  
ハ。何んかやと論せしむ。

後の話。に室内の者。とて教育する。のめり。教







自名七五身婦人、趣々うら、是れを閨房の侶伴  
 とする、この、價を不慮とめず、其れ、一又奴と推す  
 この價は、( )も、七、也、うら、

有自石のり

- 一 鮎姑射終言 二 十四
- 一 送若少集 山屋のり 一 畫銷長士表 七
- 一 二七七のり 三 三
- 一 去垢集 三 三
- 一 黄糸の論 歌本 四
- 一 仙傳 後入 一 五
- 一 純國法の 二 十
- 一 龍定 河判記 七
- 一 夢のり 目六 外 一 一
- 一 此喜長傳 歌本 五
- 一 畫銷長士表 七 七
- 一 去垢集 三 三
- 一 純歌四本解 五 五
- 一 三々女 五 五
- 一 娯樂初 五 五
- 一 春宮秘録 二 二
- 一 肉蒲團 歌本 五

- 一 末摘花 四 七
- 一 〇の花 七 七

鮎姑射終言、黄糸の論、如長尺傳、宮不若く、流  
 たるを、若く、い、ん、河判本、う、今、獲、う、い、き、い、  
 河の自布、い、も、改、也、後入、河判、或、河判、記、  
 二、ヤリ、川柳、流、一、本、の、注、式、を、代、表、す、る、の、こ、も、見  
 ふ、し、後、入、も、免、角、零、を、う、う、い、ま、也、  
 三、味、の、若、集、や、一、湖、如、一、二、全、の、集、や、う、あ、  
 此種、の、河、判、の、り、

- 一 何るあう
- 一 大東園語
- 一 兼月帖
- 一 痴漢子傳
- 一 春霞折甲







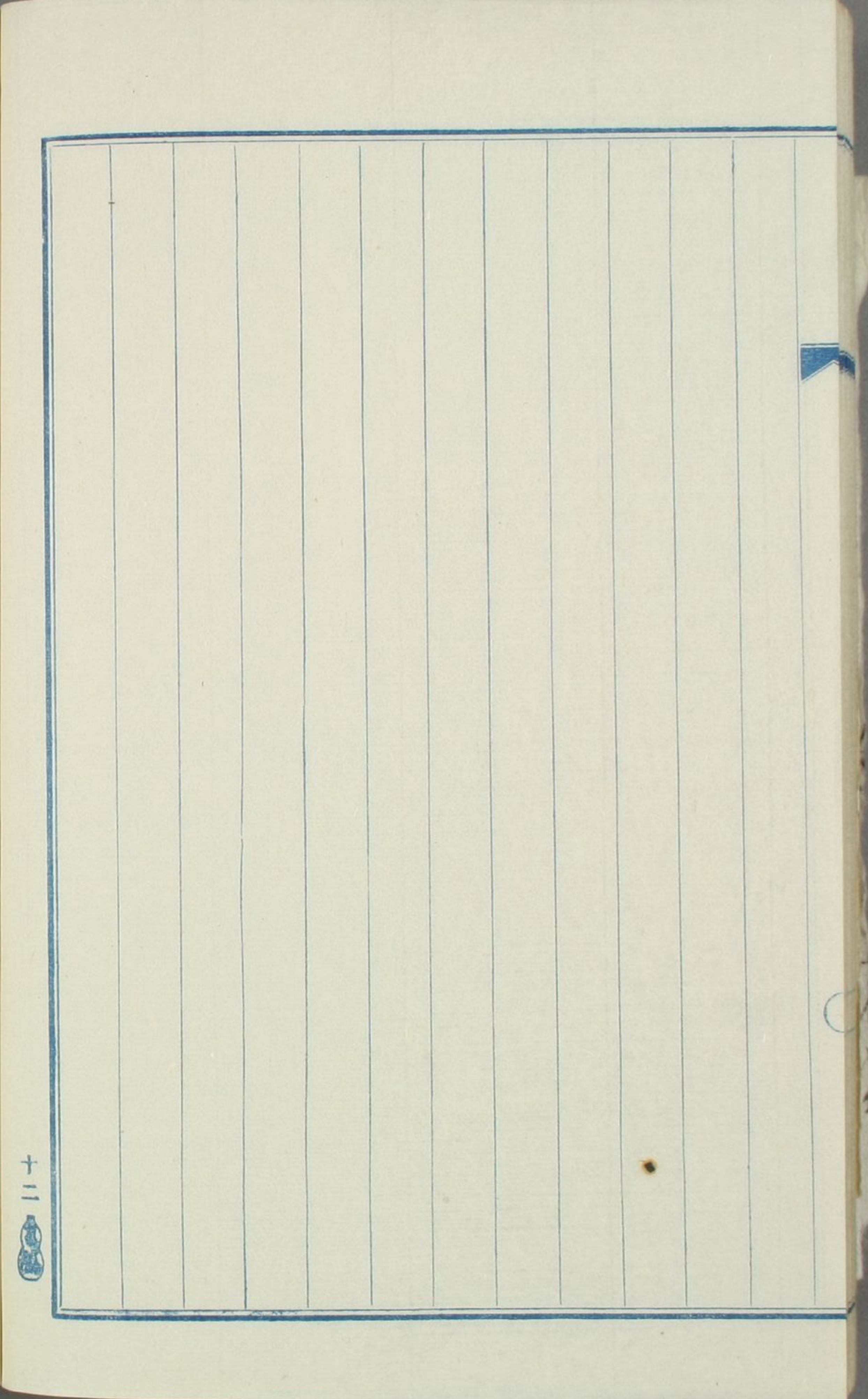
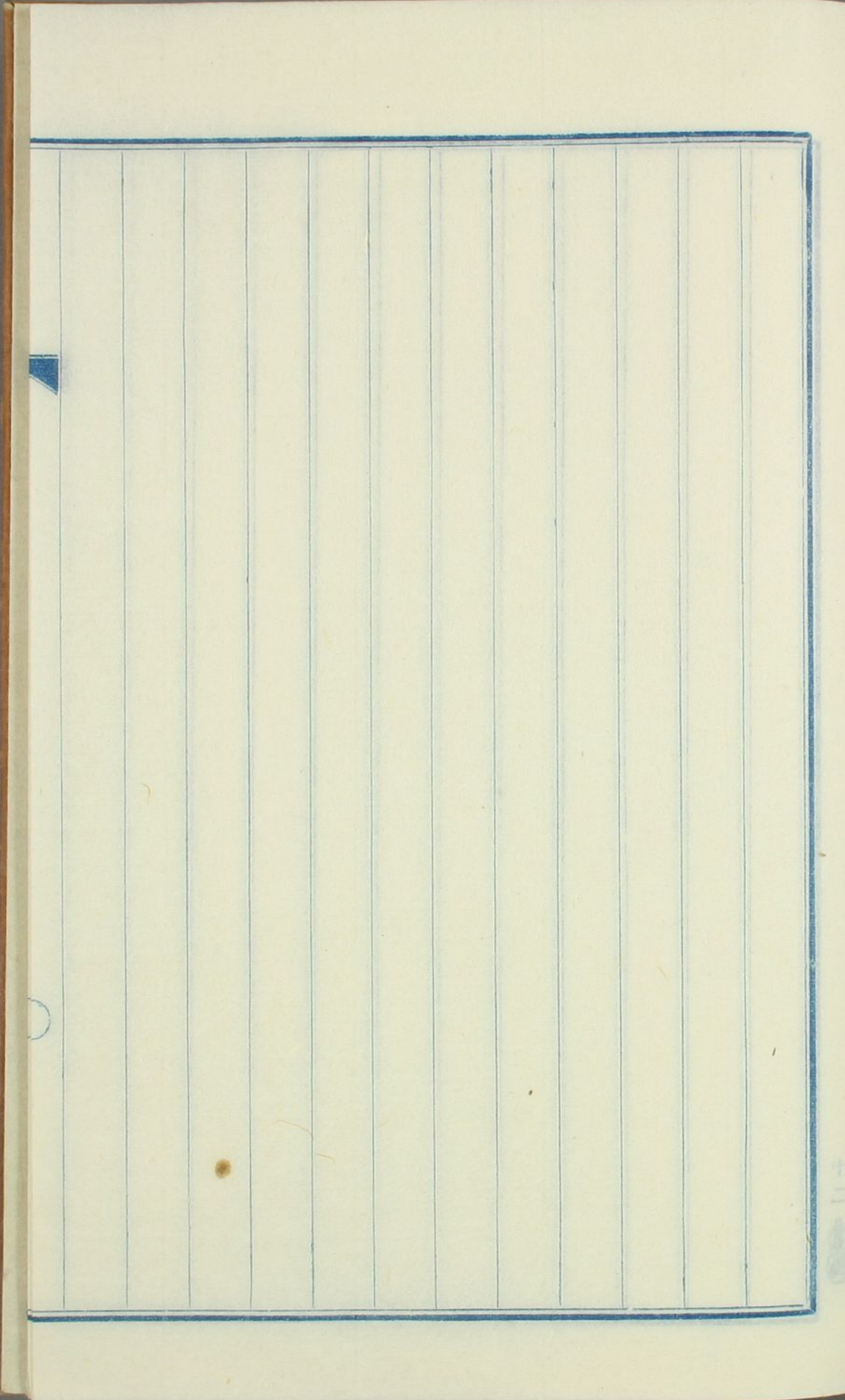




南史齊衡陽王傳

鈞手自細書。寫五經部。為一卷。  
置于中箱中。以仿造。諸王聞  
而爭效。為中箱五經。





十一  
十一





以下全て

白紙



